

石造りアーチ橋の設計

20代目の日本橋は、当時の東京市 橋梁課長 樺島正義と主任技師 米元晋一よねもとしんいちによって設計されました。

日本橋が設計された当時、日本はヨーロッパやアメリカの進んだ文化や技術を取り入れて、国を造ろうとしていました。たとえば、「東京をパリのように」がまちづくりの合い言葉とされました。

また、江戸時代には無かった自動車や電車も走り始め、

今後、さらに交通量は増えていくと考えられたため、より頑丈で、長持ちする橋にする必要がありました。

そのために木製ではなく西洋の技術を取り入れ、石やレンガを用いた頑丈で美しい橋を造ることになりました。

日本橋の構造設計を担当した人

かばしま まさよし
樺島 正義（土木技術者）

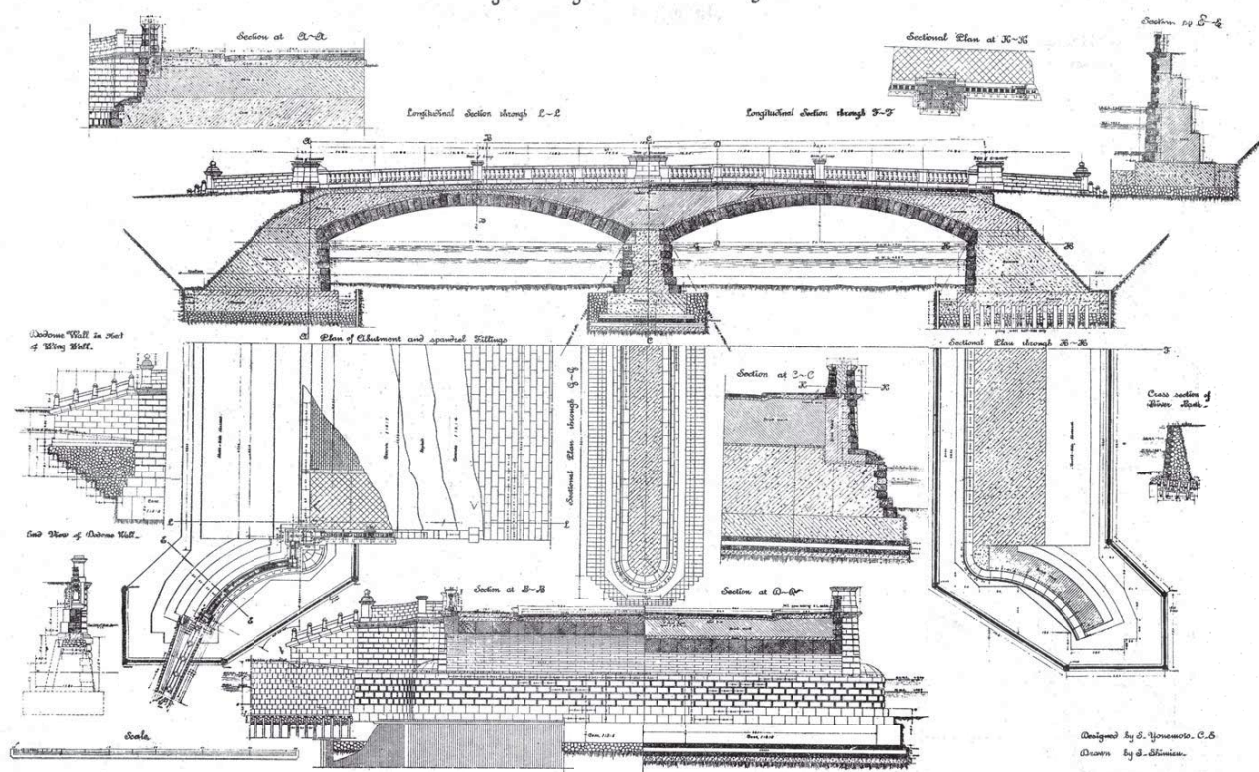
じんぐうばし すみだがわ
神宮橋（渋谷区）や隅田川新大橋

（明治村に一部展示）などを設計。

よねもと しんいち
米元 晋一（土木技術者）

みどりまちはいすいじょう あしかが
緑町排水場（栃木県足利市）などを設計。

Drawings showing the Construction of Nihonbashi



せいさい

▲とても精細に描かれた日本橋の設計図 1908（明治41）年